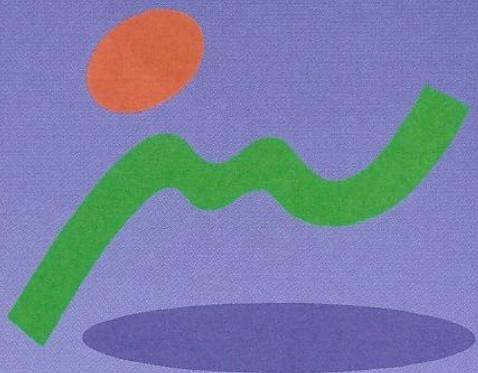


日韓國際環境賞

The Asian Environmental Awards 2015

한일국제환경상



受賞者

[日本側] 朴惠淑・三重大学教授

[韓国側] 北東アジア長距離越境大気汚染(LTP)
研究プロジェクト事務局

表彰式

日時：2015年10月29日(木)午後2時

場所：ホテル椿山荘東京 プラザ棟1F ペガサス

主催：毎日新聞社、朝鮮日報社

後援：外務省、環境省、駐日大韓民国大使館

協賛：城西国際大学

日韓国際環境賞制定趣旨

毎日新聞社と朝鮮日報社は、日韓国交正常化30周年の1995年、東アジア地域を中心に環境保護や公害防止などの活動に優れた貢献をした個人や団体を顕彰することを目的に「日韓(韓日)国際環境賞」を制定しました。世界中が注目するほど急激な発展を続ける中国を中心に日本、韓国、台湾、ロシア極東地区を含む東アジア地域は、国際経済の重要な拠点として成長を遂げるまでになってきました。急速な工業化、増大するエネルギー消費に伴う大気汚染、酸性雨などは深刻な公害問題に発展し、国境を越えて拡大しています。東アジア地域が直面する様々な環境問題に各国・地域が力を合わせてこそ本質的な解決策を見出すことができる、というのが共通認識です。

日韓国際環境賞にふさわしい授賞者を選ぶためにまず、両国の新聞社が読者の協力を得て、全国通信網を駆使して団体・個人の授賞候補の推薦を受け付けます。新聞社内で第1次審査を実施、その後、環境問題の専門家など有識者で構成する最終審査委員会で両国のそれぞれの授賞者を決定します。

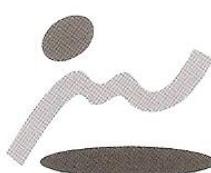
日本と韓国の言論界をリードする両社は、今後も共同で日韓国際環境賞に取り組み、各国・地域行政機関、非政府組織(N G O)、非営利組織(N P O)、市民活動などの連携を強め、地球環境保全の決意を広く世界にアピールしていくと考えております。

マイニチ新聞社와 조선일보사는 한일국교정상화 30주년(1995년)에, 동아시아지역을 중심으로 환경보호 또는 공해방지 등의 활동에 현저히 공헌을 한 개인이나 단체를 시상하기 위해 「한일국제환경상」을 제정했습니다.

온 세계가 주목할 정도로 급격한 발전을 계속하고 있는 중국을 중심으로, 한국, 일본, 타이완, 러시아 극동지구를 포함한 동아시아 지역은 국제 경제의 중요한 거점으로 성장하기에 이르렀습니다. 급속한 공업화, 늘어나는 에너지 소비에 따른 대기오염과 산성비 등은 심각한 공해 문제로 발전함과 동시에 국경을 초월하여 확대되고 있습니다. 동아시아지역이 직면하고 있는 다양한 환경问题是, 각 나라와 지역이 힘을 합해야만 본질적인 해결책을 찾을 수 있다는 것이 공통된 인식입니다.

한일국제환경상에 적합한 수상자를 임명함에 앞서, 양국의 신문사가 독자로부터 협력을 얻으면서, 전국 통신망을 통한 단체 또는 개인의 수상후보 추천을 접수합니다. 신문사내에서의 1차 심사를 거친 후에, 환경문제 전문가 등 유식자로 구성된 최종 심사위원회에서 양국의 각각 수상자를 결정합니다.

한국과 일본의 언론계를 리드하는 양사는 추후에도 공동으로 국제환경상에 대처하기 위한 각국의 지역행정기관과 비정부조직(NGO), 비영리단체(NPO), 시민활동단체 등과의 연계를 강화하고 지역환경 보전을 위해, 세계를 향해 보다 넓리 전개해 나갈 것을 결의하는 바입니다.



◆受賞者紹介(日本)

朴惠淑・三重大学教授



「公害を過去の負の遺産ととらえるのではなく、その経験を未来の地域づくりに生かすことが大切です」

高度経済成長期にコンビナート群から排出されたばい煙が原因で、住民がぜんそくを患う公害が起きた三重県四日市。その教訓を未来へ生かす「四日市学」を提唱した朴惠淑・三重大教授(61)はきっぱりとこう言った。

韓国ソウル市出身。小学生だった1960年代、社会科の授業で四日市ぜんそくなどの日本の4大公害を知り、大気汚染の研究者を志した。梨花女子大で気候学(大気汚染)を学び、筑波大学院に留学。米ヒューストン大で研究生活を送った後、95年に日本に戻り、三重大に助教授として赴任した。すぐに公害の語り部の沢井余志郎さん(87)やぜんそく患者の野田之一(ゆきかず)さん(83)を訪ねた。

ぜんそく患者らがコンビナート企業を訴え勝訴してから20年以上がたち、「四日市公害は終わった」と言っていた。資料館は整備されておらず「公害を引き起こした企業や対策をとらなかった行政は悪い。だが、それを許してしまったのは、市民社会が成熟していなかった面もあるのではないか」と感じた朴教授は、四日市学を提唱した。

その柱は①命の尊厳とは何かを問う「人間学」②経済と環境の持続可能な社会システムを提案する「未来学」③次世代へと教訓をつなぐ「環境教育学」④現在、公害に苦しんでいるアジア地域で四日市公害の教訓を生かす国際協力「アジア学」だ。2004年から三重大で講座をスタートさせた。三重大では、11年から4年間、副学長を務め、国立大で初の外国

人副学長として注目を集めた。世界一の環境先進大学をめざし、学生へのエコバッグの配布や大学生協でのレジ袋の有料化を実施した。

活動は国内にとどまらない。東アジアの研究者やNGOなどが参加して大気汚染や水質汚濁などを監視するネットワーク「東アジア大気／環境行動ネットワーク」の代表も務める。02年に日韓共催のサッカー・ワールドカップ(W杯)大会に合わせ、大気汚染濃度測定プロジェクト(ブルースカイ)を実施。W杯開催地などで、児童・学生らが簡易測定機を使って大気汚染物質を測定し、データを公開した。モンゴル国立大などとの連携で、首都ウランバートル周辺の大気汚染や地下水汚染などについて研究。ロシア・ハバロフスク科学アカデミーと連携してアムール側の水質汚濁防止などにも取り組んだ。

最近は、次世代へと教訓をつなぐ「ESD」、つまり国連教育科学文化機関(ユネスコ)が主導する「持続可能な開発のための教育」(Education for Sustainable Development)の推進に力を入れている。昨年、名古屋市でESDに関するユネスコ主催の国際会議が開かれた際に、19カ国から210人の中高生を三重大に集めた会議を開いた。多岐にわたる活動の根底にあるのは、地域で取り組む身近な活動が地球環境保全につながるという信念からだ。

今年3月には長年の懸案だった公害資料館「四日市公害と環境未来館」が四日市市にオープンした。「ここをプラットフォームに、痛い経験をした四日市が世界一の環境先進都市のモデルになるよう活動したい」と新たな意欲を燃やす。